
Re:Act **無限の幻想英雄譚**

利瀬 時夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Re:Act

無限の幻想英雄譚

【Nコード】

N9320Z

【作者名】

利瀬 時夜

【あらすじ】

『君、翌日死ぬから今日私が直々に殺して上げる』

自称幼女神様に死刑宣告された主人公。変な能力付与された上に、死に難しい体質となった彼に怖い物はない。さあ、異世界に逝こうか。自称神様によって召喚されたのは異世界。無論、魔法も魔物も存在し、銃刀法違反何それ美味しいの世界。戦争や紛争、内戦勃発する場所もあり、治安は最低。奴隷制度が必ず存在するらしく、通称『神様史上最低の世界』。何故に其処に俺を召喚したし。そして彼は成長する。そんな最低最悪の世界で、護るべき者を見付け、

大切な物を掴み、大事な居場所を持つ。そんな主人公の、儂くも美しく、笑い有り涙有り、そして何時の間にか全世界を巻き込む大問題が。自称執筆者による優柔不断作品第三作目。異世界トリック主人公最強系物語、此処に開幕。不定期更新、更新遅滞。R15程度の性描写や、残酷な表現、描写が苦手な方は即座にバックブラウザ。大丈夫な方は『だがそれが良い』と言ってお待ち下さい。それではどうぞ。終わり無き物語の世界によっこそいらっしやいました。二つの作品の合体作品とも言えます故、二作品の主人公も友情出演ですが登場します。それではどうぞ

物語主要用語紹介（随時更新）（前書き）

はいはいどうも。

久し振りの投稿です。

さて、この度、二つの作品の合体作品を描かせて頂きます。

何故か、と申しますと、友人が、

『この作品、混ぜたら面白いと思う』

と言い出したのがきっかけです。

進んでないのなら混ぜちゃえ、と言う友人の悪魔の囁きより生まれ
ました。

それでは、二作品の主人公も友情出演しますので、どうぞ

物語主要用語紹介（随時更新）

『レジエンディア』

主人公の召喚された異世界。

合計六大陸に分裂しており、それぞれがそれぞれで役割をこなしている。

？ 東方大陸

？ 西方大陸

？ 北方大陸

？ 南方大陸

？ 中央大陸

？ 浮遊大陸

何処の領域にも納まらないのが浮遊大陸で、周期をかけて世界を巡っているのだと言う。

十年に一度世界に勇者が召喚される事となっており、丁度主人公は十年目で召喚されたのだと言う。主人公は東方大陸に召喚される事となる。

『第六血盟』と呼ばれる大陸を司る頂点達の集まる集会もあり、これに出席するのは皆『司界者^{ルシア}』と呼ばれる者達だけである。『司界者』は百年に一度の割合で交代が為され、『司界者』の力は軍神と呼ばれる召喚獣をも一撃で殺す力を持つと言う。

マテリアル・ワールド
『物質世界』

地球の、それも人間界を指す言葉。

物質や法則で完全支配された世界の事を指す単語。

十年に一度、勇者として召喚する為の媒体でもある。

ルシア・デルエート・アティブネス
『司界者介入禁止令』

司界者を決して戦争に介入させはならないと言う皆で決定した法

律。

破った者には神の鉄槌と言つ恐ろしき罰が待っていると云う。神の鉄槌は天上の裁きと言つ話もあり、天上の裁きを受けた者は欠片一つも残らず消え去る運命とも言われている。

『魔力』

常人には不可能な手法や結果を実現する力の源。

自然界に満ち溢れており、精霊の力とも呼ばれている。

『魔法』

魔力を媒体として発動する超常的克神秘的な力。基本的に黒魔術と白魔術に大分類されるが、この分類は便宜的な物で、実際時魔術や空間魔術等も存在するため数は不明とも言える。

文化文化、居場所居場所で魔術発動条件は違い、それが自然界の精霊に干渉する事で発動する魔術と、自然界に干渉するだけで発動するかの違いや、神への祈りや誓い、生贄により発動する犠牲儀式魔法なども民族間では存在したりもする。一般的に魔法は『マジ』や『マジエスタ』と呼ばれ、魔法相殺、魔法発動無効化装置等が今では存在する。『水晶』^{クリスタル}と呼ばれる魔力により生成された魔力の塊を媒体に発動する事も可能。他にも『妙技』や『珍技』、『魔道』や『魔導』とも呼ばれる力でもあるが、それはやはり文化の違いとも言える。

『詠唱』^{スベル}

魔法を発動する際に捧げる言の葉。

長ければ長い程、その魔法の級は高く、威力も大きい。

『技巧能術』^{アーツスキル}

剣術、槍術、弓術、武術、流術を指し、技としてそれを確定する為の能力手段。

魔法を持たない者は、この力を強力化させ、単独でも最前線を戦い抜ける様に日々訓練を怠らないと言う。相当なスキル所持者は最前線でも主力を張れる程。

『王政国家アクトマレシア』

通称『王国』。時代の波に飲まれた悲運の国ともされ、伝説にも残る霸王の血統を引く『朱覇』^{しゅうは}司界者エルシエアⅡロンⅡスザクがアクトマレシア家興したのを発祥とする、由緒正しき国家。霸王の遺産『朱覇の指輪』を代々受け継ぐ三国の一つ。同盟国や属国は多く、関係は概ね良好。一部を除く。人口約3000万人を誇る国家で、グラティアと呼ばれる一騎当千にも及ぶ朱天騎士を保有する強国でもある。しかし、建国から350年の時、隣国であった『皇帝国家テンペシア』の滅亡により、領地拡大するもその分、王国を滅ぼし、その領地を全て得ようとする国家との戦争により、第一時期のアクトマレシアは滅亡。そして新たにアクトマレシアとして建国された現在は概ね関係良好、領土もそこそこと言った状態で存在している。

『皇帝国家エスペンティア』

通称『皇国』。一度帝国に滅ぼされたテンペシアの復興後の姿。消失を遂げた国家とも呼ばれており、もう一つの霸王の血統を引く『碧覇』^{へきは}司界者ラヴニアⅡアスケルⅡゲンブが存在し、霸王の遺産『碧覇の断片』を保有する国家。同盟国と言うか連合国『連合国アスケメディア』の軍を駐留させようとした親アスケメディア派が武装蜂起。この隙に乗じて『帝政国家アルトレスト』軍が侵攻し、内乱状態にあった皇都エスペアを包囲する。だが、それから数日後、謎の大爆発により当時のテンペシアは滅亡した。エスペンティアはテンペシアの残骸を排除する代わりに戦死した者達や罰初に巻き込まれた民間人を供養する儀を行い、皆を納める教会を造り上げた。ヴァスタと呼ばれる第一王子も程無くして戦死する。そしてテンペシアは完全滅亡したと言う。現在エスペンティアの人口は2500万

人弱を持ち、中にはテンペシアの生き残りも存在するらしいが、見た事はないと言う。

『帝政国家アルトレストタ』

通称『帝国』。全土に覇を唱える最強の軍事国家。最後の霸王の血統を引く『黄覇こっほ』司界者エスケアⅡルアⅡビヤツコが存在し、霸王の遺産『黄覇の契剣』を保有する国家。東方大陸の大半を領有する強国で、元は『エスシア連邦』と呼ばれる『アルトレストタ』、『ヴァイツ』、『コーディアンツ』の三大陸に跨る連邦大陸の都市国家の一つに過ぎなかったが、共和制、帝政と政治形態を変える過程で本格的な軍事国家と化し、今やエルディアンテで、一、二を競う大国となった。建国当初から協議制が根付いているため、国内の法制度は先進的克合理的。階級差別や奴隷制度は存在はする物の、市民の生活水準は極めて高い。実力で上の級に上がる事も許可されている。技術大国として発展した国家は、様々な軍事兵器を所持しており、空中浮遊要塞『要塞艦隊コルモア』や『軽巡艦隊シヴァ』、『殲滅要塞ルンフェル』等といった要塞艦隊が多く空中を浮遊している。人口は4000万人と大陸の中ではダントツでもある。

『神徒国家ヴァルエルータ』

通称『神国』。エルディアンテ全土に伝わる宗教、『サステイヴァ教』の聖地。厳密には国家とは言えないが、一応政治形態や軍事形態が整えられている為、国家として扱われている。あくまでサステイヴァ教修行の地である此処は、政治形態が整っているとは言え、其処まで深くなく、教団支援者や多額の寄付金を難民の救済に務めている、どちらかと言えば非政府的機構国家。また、大僧正がマスケルディアとアルトレストタの王位継承に関わる立場に居る事から、ヴァルエルータは国際情勢に対して一定の影響力を持つ。

『学術国家エルグラス』

通称『術国』。覇権を狙う魔法に置いては相当の実力と実戦経験を持つ国家。霸王の血統を引く『蒼覇』司界者スサナⅡエルⅡソウリユウが存在し、霸王の遺産『蒼覇の盟壁』を保有する国家。エルデアンテ大陸のアハト大砂海を越えた先にある西を納める大国。大陸中央に広がる平野部を領土とし、諸氏族の連合体として誕生した国家。国の殆どが魔法を扱える人種で、魔法を所持し、騎士にも立ち向かい、歯向かう、戦える部隊を『蒼空魔団』を保有する珍しい国家でもある。覇権を狙う国であるが、アルトレストア帝国との戦争で大敗。現在は劣勢に立たされている。軍国化制度の軍事組織を基本とした国家で、帝政政治形態を持つ。人口は1500万人と少なく、その約過半数が魔法使いである。

『連合国家アスケメディア』

通称『連国』。様々な諸国家群と、諸氏族の連合体として誕生しか国家。霸王の血統を引く『紫覇』司界者マテラⅡリアⅡイズナが存在する、いや、と言うより、存在してくれた珍しい国家。故にこの国家はマテラにより建国された国家とも言え、マテラの『国家を纏める国家』の案から生まれたともされる。解放軍と呼ばれる軍事組織を持ち、人口はおよそ1000万人。その内の三割は解放軍として最前線に立ち続けている。解放軍とは奴隷として扱われる民族人種、国家の解放を狙った外交圧力組織。エルデアンテ全土に解放軍は地下組織として存在するも、アスケメディア程の実力者の集う解放軍は中々存在しない。

『浮遊国家イエシニクリ』

通称『浮国』。危うい自由と解放に浮かぶ中立国家。霸王の血統を引く最後の者『黒覇』司界者マサムネⅡデⅡミハトⅡハバキと呼ばれる最後の血統者を存在させる、霸王の遺産『黒覇の魔晶』を保有する浮遊国家。連邦時代から続く自治的国家で、サスヴァーン侯の手腕に自治問題が掛かっている。現在の元首はレルヤⅡハルⅡサスヴ

アーン七世。魔法の蓄積された水晶の源でもある『魔晶』の産出する唯一の魔晶鉱を保有する。この魔晶鉱も管轄の内であり、無許可の密猟は禁止され、した者には罰が与えられると言う。近代の政治形態は帝国よりで、だが、帝国から人々を解放しようと言う意識は変わらず、解放軍の組織と連絡を密通している。中立の立場から人口800万人での停戦調停と称しつつ、己が国に有利な情報を発表した。その為、現在は中立国家と言うより、王国に良好な関係を築く国家とも言える。

『ナイツ・オブ・スカレット
紅十字騎士団』

王政国家アクトマレシアに存在する騎士団。

皆、白色の騎士服の裏に必ず真紅の十字架が刻まれているのを着ている事から名付けられた。

治安維持、犯罪者確保等治安関係に貢献する武装団体。

第一から第六まで存在し、第一から第二は上級任務のみ。

第三から第四は空中に舞う相手の場合出現時。

第五から第六は必ず出動する様に組み込まれている。

『ハトス・ブルグ
黒鷲』

地下にて存在する解放軍の団体。

主に奴隷解放、民族解放、種族解放や、国の場所の解放の為のデモ運動に似た行為の中でも最も強力なデモ活動と考えれば良い。

武装団体と変わらず、中には魔法を使える者や、技巧能術を扱える者が存在する。

皆無殺生を掲げているも、止むを得ない場合は殺す事もある。

『エツヴァ・リゲテート
白鷹』

黒鷹の同様だが、地上にて情報を得る情報組織。

各個人で活動し、それぞれで収集した情報を酒場の奥等で出し合い、決定する協和制が決められている。

但し、中には罪人も存在する故、捕まれば一発で『獄牢』ラビリンズ行きだと言う。

此方は武装もしているが、魔法や技巧能術より通常戦闘の方が強い。

『エル・デライト
煌刃残光』

黒鷹白鷲を駆逐する組織団体。

皆が捕縛魔法や、確保する魔法相殺武器、魔法破壊武装等を所持している。

騎士団とは違い、部隊編成がない自由構造の組織。

単独で狩る者も居れば、集団で狩る者と多々。

魔物駆逐も行うが、対魔物戦の武装とはいえない武装ばかり故、戦うには少々難有りとも言える。

『キラア・レ・ヴァルキユール
戦誇女神』

戦好きの女神、通称『戦で倒れる運命の戦士を選ぶ女神』と称される団体。

対魔物専用の駆逐組織で、それこそ女性陣が多い。

鍛え方が違うのか、男性陣の場合は筋力トレーニングが多く見える。魔法や技巧能術を主力に闘う事が多いので、通常戦闘は男性陣の団体に任せられる。

『リウフ・ス・フェンリル
騙嘘魔狼』

戦誇女神の正反対の男性陣で結成された魔物駆逐組織。

『嘘を吐かれ騙された魔の巨狼』より称された団体。

近距離での通常武器主力攻撃を得意とした男性陣オンリー組織。

魔法や技巧能術は戦誇女神に任されるので、自分達は我が物顔で戦場を駆け抜ける事が可能。

主要登場人物紹介（随時更新）（前書き）

序章と第一章に登場する主要登場人物紹介です。

章変更事に登場人物は増加しますので、宜しくお願い致します。

それではっノシ

主要登場人物紹介（随時更新）

【登場人物】

【名前】 瀬崎啓祐 | Keisuke Sezaki |

【真名】 剝裂啓祐 | Keisuke Kuresaki |

【年齢】 17歳

【髪色】 漆黒

【瞳色】 漆黒

【体格】 華奢克細身、筋肉質

【体質】

『ロンド・ザ・アンリミテッド
無限輪廻』

【能力】

インフォルティ・アイズ
『全智魔眼』

ファンタジリア・デ・ドリームワークス
『夢創具造化』

【口癖】 『やれやれ』

【仕草】 苦笑する事や肩を竦める事が多い

【武装】

『短刀』

『ペティナイフ』

【付属】

『魔眼殺しの紅朱帯』

【性格】

相当な面倒臭がり屋だが、やる時はやる男。達観した、己が納得しなければ問い詰める男でもある。

中に『剝裂』^{くれさき}と言う人物を内包しており、極度のショックやダメージを受けると瞬間的に逆転する仕組みとなっている。

飄々で余裕を持った、シニカルな言動を取り、怒る事は決して無いとは言えないが、滅多に無い。

邪道克鬼畜な戦闘方法や、言葉攻めを得意とした悪魔的な場面も見

受けられるが、それは己故だと言う。
体質故に死ぬ事が出来ない為、苦悩している模様。撫で魔であり、口から流れる様に口説き文句が漏れる為、お前は女性の敵、と言われる事もある。

短刀やナイフと言った近接に近接な近距離武器を小刻みに扱う暗殺者系統の戦闘スタイルを取り、牙を剥く敵には牙で返すのが彼。ポエム染みた台詞や舞台の語り染みた台詞を使うのは、元々演劇部部長だった故でもある。

魔眼を使う事を拒み、理由としては死人にすら触れれば何故死んだから、どう殺された、過去から全て覗け、知る事が出来てしまうからだそうだ。

殺す場合もその眼を使えば、斬るべき場所、知った弱点部位、武装の弱点場所、攻撃の中での一撃支点を狙う事が可能だが、使用時間は最大でも1時間が限度である。

【台詞】

『姫様を護る天狼座シリウスって言うのは、俺には似合わないよ』

『さあ囁れ、俺の為にその声でははっ、ならば俺が直々に囁らせてやる』

『逝きたい場所は決まったか？ 決まらないなら俺が閻魔の前に連れて行ってやる』

『あ、御免。気が変わった』

【主技】

『八夜・八風』異常な身体能力を授かった故に出来た某殺人鬼の技の物真似による技

『瞬閃・一夜』異常な身体能力を授かった故に出来た以下同文。等々。他は後々紹介します。

【名前】 神様

【年齢】 不詳

【髪色】 金色

【瞳色】 碧緑

【体格】 華奢克小柄細身

【体質】

プロヴィデンス・ガード・オールレンジ

『絶対加護領域常時展開』

【能力】

ギブ・ユイ・プレゼント

『能力授与』

ギブ・ミイ・アヒリテーシ

『能力返却』

【性格】

主人公に死刑宣告をした上に本当に殺し、異世界に叩き落した張本人。

外見幼女だが、既に年齢は300を超えており、350を超えた時点で数えるのを止めたと言う。

神様の中でも一番偉いと言っているのだが、仕事をしていない事から、本当に神様が、と言われる。

男っぽい口調と、性格から、主人公の女々しさに時折キレる。キレ易いらしく、常時煮干を持っていたりする。

異世界で戦い続け、成長した主人公に案外想いを抱く事も？

主人公に与えた体質と能力は彼の成長を見るためだと言うが、どう言う意味なのか。

【台詞】

『さあさあ、男なら1度決めた事に責任持ちなさい？』

『ちよ、アンタ！？ 逃げるの！？』

【名前】 サクヤルウニオエルフォディーレ

【年齢】 15歳

【髪色】 紫混じりの銀髪。紫銀色とも呼べる。

【瞳色】 濃紺の藍色

【体格】 華奢で小柄克細身

ハーフ・デ・ヴァンウ

【種族】 半吸血鬼

【体質】 特に無し

【魔法】

バーフェシヨナル・アイシクレート

『絶対凍結』

ヴァアンティア・サ・リアクルーツ

『疾風迅嵐』

【武装】

『ラル・ルーゼ（特注品の短剣）』

『ペティナイフ』

【性格】

元々一国の城の王のメイドだったが、その国の壊滅により、独り身。奴隸として売り出され、危険な状況に陥ったと同時に現れた主人公により救出される。

運動神経と頭脳はトップレベル故、使用魔法も上級と中級の間のも物ばかりである。

主人公に対して、恩義を感じつつ、自分でも分からぬ感情に後々気付かされる。

彼の戦闘スタイルに驚きつつ、彼の名付けた二つ名に『ピツタリじやない』と言っている。

紅茶やお菓子を作るのが得意で、褒められ、撫でられる事を好む。

満月、十五夜の夜は危険で、己の欲望や欲求に忠実になるらしい。

猫で言わば『発情期』と同様。

因みに彼の前では若干甘えん坊な一面も見せ、嫉妬する一面もちらほらと。

【台詞】

『そつね……、逃げるなら、即行になるけど　どつするっ。』

『何そつち見てるのよ……』

『もつっ、馬鹿馬鹿馬鹿っ』

【名前】 ルーザスⅡコウⅡゼⅡデルティアーゼ

【年齢】 17歳

【髪色】 金色に近いクリーム色

【瞳色】 藍色

【体格】 中肉中背

【種族】 ヒュニム 人間

【体質】 特に無し

【魔法】

『ビルディング・レ・マジエスタ
肉体強化』

【技巧能術】

『騎士剣術』

【武装】

『クインネスタ（片手直剣）』

『ラウンズオーダー（十字盾）』

【性格】

元々騎士団に所属していた青年。

現在は賞金稼ぎとして名を馳せているが、主人公と決闘し敗北。

彼を好敵手、『ライバル親友』と称し、彼の旅に着いて行く事となる。

技巧技能スキルの使用者で、サクヤに対して全くの恋愛感情を抱かない無
論年上好みの男性でもある。

冷静沈着な一面も見せるが、どちらかと言えば熱血馬鹿。直情型熱

血馬鹿とも呼ばれるが、それ位熱い方が彼らしい。

元騎士団、その上賞金首故、資金は腐るほどあるらしい。いつか世
界を回ってみたいと思っていたので丁度良いと言っている。

主人公には『俺の背中_は任せた 相棒』と言う事がある。

【台詞】

『恋愛感情？ 何を馬鹿な、俺は年上しか好かん』

『俺の背中は任せたぞ 相棒』

『背中_の傷は、騎士の、賞金稼ぎの、いや 男の恥だ！』

第零話 夢想の果てに得たのは自称神様のドロップキック

風が強い。

無限の蒼穹に浮かぶ白亜の雲の流れがそれを如実に示している。

昼の空に島が浮いている。

雲よりは低い位置に浮く、風の強さ程度では動く事はない、東南に十数キロ延びた浮遊島だ。此処からでは良く見えないが、確か幾つかの都市と多くの小規模な街や村、森や草原、湖等によって構成されていると聞く。

何時か行つて見たい物だ。

子供の頃は次から次へ夢想する、魔物の住まう森、魔法、英雄、勇者 そう、空に舞う島も例外では無く、彼はその夢に浸る事が多々あった。

何時しか彼は夢想を棄て、現実を生きていた。夢に浸っていて、それが現実になる事はないと知ったからだ。

しかし、空を舞う島だけは忘れる事は出来なかった。

現実を生きていたはずの彼の夢に度々姿を現す空を舞う島、草原に寝転がる彼の頭上を通過し行く空を漂う島 そんな懐かしき思いに想いを馳せながら、目の前の現実を受け入れた。

「大丈夫さ 俺がこの世界に居なくても、彼らならやってくれる」

新たに来る、『勇者』と呼ばれる存在に思いを馳せながら、彼の瞳を覆う紅帯を靡なびかせ、待つ。

待つて、待つて、待ち続ける。

それが己の義務であり、

それが己のエゴであるから。

そしてその日は 唐突にやって来た。

俺は高校生だ。

それはもう誰が何と言おうと健全克一般的男子高校生さ。

勿論、魔法ないし超能力も何も持たない、本当に一般的高校二年生。

日常を謳歌する、17歳の唯無駄に運動神経が良い、容姿も普通な男子高校生だ。

目立って悪い所もなければ良い所もない。

強いて言うなら、納得行くまで調べるオタク精神がある所。

それは良い事なのか、と聞かれれば、いや、そうでもないと答えるだろう。

そもそも今の時代、良い所悪い所、詰まり長所と短所を発見出来ない奴が多過ぎる。無論、俺もだが。

長所と短所が発見出来ないと、困る事は沢山有るだろう。

例えば高校受験や就職事件時の自己紹介の時。特に無い、何て書いた暁には一発で落とされる事間違いないだろう。

俺はまあ、自己紹介程度なら出来る。だから特に困らない。故に。

「はいはい。

分かった分かったから現実逃避しないでね」

現実逃避？

何を言うか、俺は今これを読んでいる読者諸君に役立つ情

報を。

「現実直視」

「……はい」

致し方ないな……、それじゃあ今俺が置かれている状況からまず整理しよう。

俺は今、自分の机に備え付けられたキャスター付き回転移動可能万能椅子に腰掛けています。

いるのだが……、如何せん、俺は椅子から少々だが浮いている。ふわふわしてますよ、妙な気分です。これが無重力って奴ですか？

違つだろつよ　まあ、と言つわけで、結論。

そりゃあ現実逃避だつてしたくなるわ。

そして目の前、まあ俺の枕を座布団変わりにして座っている（まあ浮いている）金色の、それこそ絹の様にさらつさらな流れる様な髪を持つ女性。

端整な、普通に道端を歩いていれば確実に声を掛けられるであろう整った顔立ちに、瞳は碧緑^{〈青じよく〉}。エメラルドを思わせる深い緑色の瞳は、俺の瞳をも包みそうな、怪しい輝きを放っている。

何と名前は神。名前はあるらしいが、長いから言わないらしい。まあ此处では自称神様と置いておく。

て、言うか、

「可及的速やかに居なくなれ。今何時だと思つていやがる」

「うん、用件済ませたら帰るよ」

用件とな？

ふむ、聞いてやらん事もない。

「まあ簡潔に話すよ？」

「嗚呼、そうしてくれ。朝陽が昇る前に」

「君、明日死ぬよ」

「……可笑しいな、今幻聴が。」

もう一度お願いします」

「うん、何度でも言っ上げて上げる。」

君、明日の午後1時45分34秒二丁目の交差点にて交通事故で死ぬよ？」

「……。夢か、これ」

そつだそつだ、夢だよ。これ。

夢の中で明日は気を付けろって言われてるんだな、理解したよ。それじゃあお休みなさ、

「？重力追加二倍？」
クラウイトン

「い　　ツツツ%&\$#　　?????!?!?」

……一瞬、お花畑が見えました、はい。

……死神さんが手招きしてるよ……、あるえ、可笑しいな、何でこんなに頭が痛いんだろ……。

「？解除？」

「……」

痛い痛い痛い……、痛いじゃねえか。

「この野郎……、痛えじゃねえかコノヤロー！！」

「じゃあちゃんと聞いてくれる？」

聞いてくれれば何もしないから」

「煩イライラいわ！！ マジで一瞬死に掛けたぞこの似非神様！！」

「似非言うな似非！！」

まあ聞いてよ、ちゃんと説明するから」

「説明しなきゃ極彩に散らしてやる」

倒れた回転移動可能椅子を立て、再び腰掛けた俺は目の前でやれやれと肩を竦める彼女を見詰める。

「まあ1から説明するよ。」

私達神様の中でね、未来を予知出来る神様が居るの」

「未来予知って奴か。で？」

「そそ。でね、その未来予知出来る神様が、君を見た所、君が明日死ぬって分かっちゃったんだよね。交通事故にて死亡って。しかも無残にも君は轢ひかれたまま。相手はそのまま逃げちゃうのさ」

「轢き逃げじゃねえか!!」

絶対嫌だぞそんな最期。

俺は最期は愛する人と決めてるんだ。

「そう、轢き逃げ。」

だから助けに来たの」

「おお。有り難い」

何だ助けに来たのなら先に言ってくれよな。

「でしょでしょ？」

まあ助ける方法何だけどね？」

「嗚呼、どうすりゃ良い？」

「今から私が殺して上げる」

「……」

笑顔のまま俺、硬直。

目の前には良い笑顔を浮かべて大鎌を構える自称神様。

「……」

「言い残す事はない？」

「……最期に、言いたい」

「何？」

「……どうしてこうなった」

「バイバイ」

振り下ろされる鎌。

轟、ツ！！と。

いやあ 人の体って、案外脆いんだね。

まあ脆いからこそ、怪我するんだろうけど。

結論から言わせて貰えば、一撃で首、は刎ねられましたとさ。

「いやあ、一発でイけたじゃないか」

「イじゃない。逝、だな。この場合は」

さてさて、今置かれている状況を再確認しよう。

俺は自称神様に明日死ぬから今殺して上げると言われ、本気で首を刎ねられた。

で、今俺はと言うと……、うん、一種の霊体になって自分の死体を見下ろしています。

すげえシユール……。

「あはは、確かに。」

それじゃあ荷造りしようか」

「荷造り？」

「そそ。

ほらほら、っと、そうだね。先に能力、渡して置こうか」

「能力？」

待て待て待て、良く分からなくなつて来たぞ？

「なあ、俺を何故殺した？」

「ん？

理由は簡単。君を殺す 勇者として異世界へ 世界改変 終結」

「俺を……、勇者として、異世界に召喚するつてのか？」

「そう言う事。流石現役高校生。飲み込み早いね」

「今は言われても照れる余裕がない」

「だよな。

まあ取り敢えず能力渡して置くよ。多分この能力あれば、君、絶対負けないから。あ、でも負けるかも。ま、負けても死なないよ、絶対」

「何だか嫌な予感しかしないんだけど？」

逆に嫌な予感以外するのかと尋ねられればしないとしか答えられ

ないね。

「大丈夫大丈夫。」

「それじゃあ渡すよ?」

「あ、嗚呼って、どうやって渡すんだ?」

「握手か? それとも契約とか?」

「ん? 二つやって」

「へ?」

「一歩此方に踏み出して、」

「時間が止まった気がした。」

「触れ合う唇、数秒、時間が停止した気がしたんだ。」

「はあ」と生暖かい吐息と共に唇が離れば、俺硬直。

「自称神様は神様で『にゅふふ』と厭らしい笑みを浮かべて俺を指差してから告げて来る。」

「渡したよ?」

「1つは『ファンタジリア・デ・ドリームワークス夢創具現化』。夢想した物を本当に具現化する創造能力さ。何でも具現化出来るよ。」

「で、もう1つが『インフォルティ・アイズ全智魔眼』。見た物、触れた物、聞いた物全てから情報を得る事の出来る創造系能力にはピッタリの能力だよ。勿論、これも追加で渡しとく」

まだ唇に唇の感触が残っている中、手渡されたのは、紅色の包帯。
えと……、これどうしろと？

「それ、眼に眼帯みたく巻いて置けば魔眼殺せるから。
勿論、その帯は神様が作った神具だから、付けてても見得るよ。
最高級だしね、当たり前だけど」

思考がまだ回らない。

ほわほわする……、ええい！！ 悪かったな、ファーストだった
んだよ！！ 今の！！ 悪いか畜生！！

で、何だって？ 眼に巻けば魔眼殺し？ 何処ぞの某厨二の星の
便利眼鏡ですか？

まあ……、付けて見るか、言われたんだし。

俺は言われた通り、眼にその紅帯を巻き、眼帯の形で後ろで縛り、
止める。

と、

「おおおお……、見得る。見得るぞ、ちゃんと」

「でしょでしょ？」

高級な奴だからしかも破けない！」

「最高だな、それ。

で、俺このまま寝て良いの？」

「……」

あれ、神様の顔が怖い。

寝ちゃ駄目なの……、流石に一睡もしないで行くのはちょっと辛

い物があるんだけども。いや別にあれですよ、一緒に寝たいとかじゃなくてね、本気で眠いの。分かる？ 極度の睡眠欲が俺に今襲い掛かってって、ちよっと神様？ 何故俺を押す？ 何処へ連れて行く？ 待て待て待て、待ってくれ待て下さい待てや待ってよ！！

「……で、俺まだ荷造りしてないんだけど」

その後、俺を押していた自称神様は俺を見上げ、一瞬ムツとしてから、溜め息を吐いて、俺に荷造りの時間をくれました、とさ。

約30分後。

俺のその創造する能力とやらでまずは某スキマ妖怪のスキマを応用したコートを創造。それを纏い、ポケットに服から携帯、時計、必要最低限の食糧、漫画、本、ゲーム、ノートや筆箱、ネックレスや香水まで取り敢えず入れて行く。まあ結局使うか分からない物までたっぷりと入れましたよ。

準備は万全、現在の服装は下薄手スラックス、上、白シャツ、更
に上、黒いコートと言った具合。まあお洒落お洒落じゃないと言われれば普通だよな。正直言っ

「で、何処から行くの？」

「此処から」

「此処？」

既に神様は魔法陣らしき物を床に展開しており、彼女の言葉と同時に床が抜けた。おおう、人様の家の床、抜くなよな……。

「さあ、行こうか。」

つと、そうだ。君の携帯、私とだけ繋がる様にしたから」

「行こうかって落ちろと!？」

てかいつの間に弄った?!」

「うん、落ちて。」

へ? 君が荷造りしてる隙に」

「落ちてって怖いわ! 流石に男の子でも怖いですよあれは!？」

つて、オイこら!! 勝手に弄るな!!」

「つべこべ言わず、とつとと行けい!!」

「んな理不尽な!?! つて……、は、アツ!?!」

結局、俺は神様に見事なまでのドロップキックを喰らい、穴に落とされました。

何時か殺す、一瞬だけ殺意の湧いた俺でしたよ、はい。

てか、本当に穴だな……、何処まで落ちるんだよ、これ……。

ね やれやれ……、まあ、第二の人生……、楽しんでみるとしますか

第零話 夢想の果てに得たのは自称神様のドロップキック(後書き)

序章ですな。

感想、待ってます。

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9320z/>

Re:Act 無限の幻想英雄譚

2011年12月29日04時47分発行